

# 水辺の 生物



## ヌマチチブ

ハゼ科ハゼ亜科チチブ属

写真提供及び校閲：岐阜県世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ

**日** 本の淡水産チチブ類は長い間、チチブ 1 種として扱われてきた。関東地方などでは「ダボハゼ」、高知県などでは「ゴリ」などと呼ばれて子供たちにも親しまれてきた魚である。チチブ属の魚は日本を含む東アジアに分布し、現在 7 種が知られているが、チチブとヌマチチブの間では、交雑によってミトコンドリア DNA の種間移動が起きていることが分かっている。遺伝的に異なる集団でありながら、交雑によって一部の遺伝子のやり取りを続けているという、分類学上、非常に興味深い種群なのだという。

北海道から九州にかけて広く分布し、川の汽水域から中流域、汽水湖、ため池など極めて多様な場所に生息する。水の汚れにも強く、都市河川にもすむ。岩や倒木など硬い基底がある場所や礫底を好んで生活する。雑食性で藻類、小型の無脊椎動物や魚も食べる。

体色は暗色で頭部から顎にかけて白点がまばらにある。メスや未成熟なオスの胸びれの付け根に黄土色の横帯があり、そのなかに明瞭に枝分かれした橙色の線が入るところが他のチチブ類と異なる特徴だ。産卵期のオスは体全体が真っ黒になり、頭部の白点は青色の小さな点に変わる。また、胸びれの付け根は青白色になり橙色の線も消え、第一背びれのとげやひれ膜が伸長する。一方、メスの第一背びれは伸びず、体色が白っぽくなる。

求愛行動中のオスは首を振ってグルグルと鳴いたり、ジグザグダンスをしたりする。春から夏にかけて川で産卵し、ふ化した仔魚はすぐに海に下り、2cm ぐらいに成長してから川を遡上する。他のハゼ科の仲間と同様に吸盤状の腹びれを持ち、岩などに吸い付いて流れの速い川やある程度の段差も乗り越える。本来は回遊魚であるが、容易に陸封され純淡水域で生涯を暮らす個体群もある。昔から日本各地で捕獲されて佃煮、卵とじ、天ぷらなどにして食されている。

参考文献：『改訂版・日本の淡水魚』2002年・山と溪谷社

『日本のハゼ・決定版』瀬能宏監修・2004年・平凡社

これまでに紹介した「水辺の生物」のうち主なものを水資源機構ホームページに掲載しています  
(トップページ右側「水辺の生物」をクリック)